新型インフル騒動で「ダチョウマスク」が大人気

世界的に猛威を振るっている新型インフルエンザの警戒感が高まる中で、ダチョウ抗体マスクが注目を集めている。インフルエンザウイルスを不活化する抗体を、ダチョウの卵から大量に生産する方法を京都府立大生命環境科学研究科の塚本康浩教授（40）が開発。鳥インフルエンザなどの抗体マスクとして昨年10月に商品化されており、ネット上のオンラインショップ、薬局ともに売り切れが続出している。

迫り来る新型インフルエンザ猛威から守ってくれる救世主は、ダチョウかもしれない。ダチョウ抗体マスクを開発・生産する福岡県飯塚市の「クロシード社」には全国から問い合わせが殺到しており、ネット販売は売り切れが続出。薬局でも品切れ状態が続いており、福岡市中央区の販売店、同仁堂では「4月下旬ぐらいから売り切れています。入荷するのはゴールデンウイーク明け」と説明した。

インフルエンザ対策用にマスクに塗布する抗体は、マウスやウサギなどの血液や、ニワトリの卵黄から精製する方法で生産が行われていた。だが、生産コストが高く、大量生産に向かないという難点があった。

そこで「ダチョウカ　愛する鳥を『救世主』に変えた博士の研究生活」（朝日新聞出版）の著者で“ダチョウ博士”の異名をもつ京都府大の塚本教授が注目したのは、ニワトリに比べて感染症に強く、鶏卵の25～30倍の大きさの卵を産むダチョウパワーだ。ダチョウ牧場に協力を要請し、抗体の大量生産態勢を整備。ダチョウ1羽でウサギ800羽ぶんの抗体生産を可能にし、低コスト生産技術を開発した。

昨年6月には大学発のベンチャー企業「オーストリッチファーマ株式会社」を設立。ダチョウマスクは、10月に商品化された。生産するクロシード社とパートナーシップを結ぶ電通九州のメディカル担当者によると、これまで1日100件程度だった「抗体マスク」の公式サイトのアクセス数が3月中旬頃から増加し始め、WHOが緊急委員会を開き、警戒レベル「4」の引き上げを発表した28日には約3000件に跳ね上がったという。

国民的な警戒感に比例して注目されているが、今回の新型インフルエンザに対してどれだけ有効かは、まだ未知数だ。塚本教授は「2007年に行った豚を使っての実験では結果は出ていますが、今はやっているインフルエンザに有効かどうかは、実際にウイルスを入手して実験しなければ分からない。遅かれ早かれ、（効果の有無は）はっきりはするでしょう」と説明した。

◆ダチョウ卵黄抗体マスク　クロシード社製。20枚入りで男性用、女性用、子供用3種類ともに定価6720円。36枚入りも販売。

（2009年5月2日06時02分　スポーツ報知）